

## 編者はしがき

本書は、主に「運命」について語られている。「運命」は変えられるのか、あるいは変えられないのか、そもそも「運命」とはいかなるものなのか、本書はそれに詳細に及ぶ。本書第九章「愛の神による運命の修正」には次のように説かれている。

「今日展開する人間の運命」というものは過去のその人の念の集積の現実化として、既に前日以前に決定しているという多数の事実を挙げた。そしてそれに続いて今日の運命が今日の祈りによって改善されたと認むべき四つの実例を挙げたのであります。(1)吾々の今日の運命は既に決定している。(2)しかし今日の運命は今日の祈りによって

改善される。この二つの一見相反するが如き事実は如何に解釈すべきものであろうか。どちらも正しい。吾々の「今日の運命」は既に吾々自身の過去の念の自然的展開、自然的自叙作用、自然的自浄作用として高まれる波が、平かに復する自然の作用として決定しているのであります」(二四七―二四八頁)

現在の我々の運命は過去の我々の念の集積の結果であり、運命は心(想念)によってつくられる。運命は常に何をより多く思っているか、その思い・念・想念の総決算として現れてくる。具体的には、三つの心の法則に従って運命は形成される。一つは、心に強く描いたものが実現する(想念具象化の法則)、類は類をもって集まり類でないものは反発する(同類親和の法則)、与えたものが与え返される(動・反動の法則)。それを仏教では「三界は唯心所現・心外無別法」といい、生長の家では三界はわが心の現す所、「肉体も環境もわが心の影」という。

では、「運命は心によってつくられる」というその「心」の構造とはいかなるものであり、どのようにコントロールし運命好転につなぐべきだろうか。谷口雅春先

生は立教当初より十九世紀末ドイツに興つた精神分析学にも言及し、潜在意識を重視された。よき運命を切り拓くには、表面の心(現在意識)だけでなく奥底の心(潜在意識)を変換することが肝要であり、その潜在意識に隠れている抑圧感情を解放、浄化せしめることが大切であると説かれる。本書には「精神分析の結果によつて何が判るかと申しますと、人間は自己の罪を押し隠し、罪無きを装い、自分は犬でも良人でも罵つたことのないような上品な偽善的な顔をして、自分自身もその罪を忘れてしまつて、全然罪の無いもののように思い込んでしまつてもその罪は決して消えていないということとであります。(中略)潜在意識の鉄管の底に沈澱していた罪の水垢が表面に浮び出たときに、かえつて罪が流れ去つたのであります。宗教ではこれを懺悔といい、精神分析ではこれを観念泄瀉(または、観念洗淨)といつている、どちらでも同じこととあります(三七―三八頁)と述べておられるのである。

運命は決して迫り来る侵入者ではない。人間の力ではいかんともし難い暴力的力ではない。だから、不幸な運命を嘆くことも、幸福な運命を失うことを恐れることも必要ではない。いま、我々がすべきことは、我々が運命の支配者であることを自覚し、善き運命を招来する心の持ち方を会得することである。そこから未来のよき運命の創造が始まる。

「未来」は畑であり、「心」は種子である。如何なる種子を畑に播くか。播かれる種子により畑に出来る作物は千差万別である(「智慧の言葉」と谷口雅春先生が説かれる所以である)。

さて、本書のもう一つの特徴は、「宗教」と「国家」との両立が説かれていることである。これこそは今日、特筆大書されなければならない。それというのも、「宗教」と「国家」とは、ややもすれば相容れない。曰く、地球に国境はない。曰く、民族を超え、国家を超えるのが「宗教」の使命である。ところが、谷口雅春先生はそのような安直な論に決して与されない。第八章「祖国愛と神の道」においてこう説かれる。

「郷土愛、更にそれが大きくなつては祖国愛——それは超越的な汎世界的な立場から観まするならば、一個の執著の念だとも評されましようが、更にそれを深く考えます

と、日本に生れた日本人は日本を愛し善くすることによって世界に奉仕し、人類に貢献すべきであります。日本人が日本的であることが、世界のためになるのは、桜の木が桜の花を咲かせることによって人類を喜ばすのと同様であります。国民がその国土に生れて、その国土から恩恵を受け、自分が現在安穩に生活を続けられているのも全て国土のお蔭です。国土の恩と同時に、その国土の開発につぶさに艱苦を嘗めつつ努力して来られた祖先の賜でもあります。此の恩この賜の一切を否定してしまつて、祖国などはどうでも好い、祖先の意志などというものはどうでも好いものだというように祖国に対して反逆的思想をいだくということは、恩の否定、賜の否定、感謝の否定ということになつて、これは神の道——人の道ではないのであります(一九六〇九七頁)

ここに明らかのように、谷口雅春先生の教えは「鎮護国家」を説く。実相世界の中心帰一の構図の純粹投影としての「日本国家」という真理によつて、谷口雅春先生は、「人類光明化運動」と並んで「日本国実相顕現運動」を一生涯に渡つて展開されたのである。

本書を繙くことによつて、谷口雅春先生の説かれた「人を救い、国を救い、世界人類を救う教え」に思いを致していただければ、これに勝る喜びはない。

平成二十五年六月吉日

谷口雅春著作編纂委員会